



TITLE:

<書評>田村うらら著:『トルコ絨毯
が織りなす社会生活--グローバルに
流通するモノをめぐる民族誌』世
界思想社、2013年、5,000円+税、
336頁

AUTHOR(S):

岩谷, 彩子

CITATION:

岩谷, 彩子. <書評>田村うらら著:『トルコ絨毯が織りなす社会生活--グローバルに流通するモノをめぐる民族誌』世界思想社、2013年、5,000円+税、336頁. コンタクト・ゾーン 2014, 6(2013): 239-245

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198473>

RIGHT:

田村うらら著

『トルコ絨毯が織りなす社会生活 ― グローバルに流通するモノをめぐる民族誌』

世界思想社、2013年、5,000円＋税、336頁

岩谷彩子

近年トルコに出かける日本人観光客も増加し、日本におけるトルコのイメージも多様化している。それでもトルコといえば絨毯というイメージは相変わらず強く、日本国内にもトルコ絨毯商の店やキリムを売るインテリアショップは多く存在する。現代に継承される「伝統」文化として、あるいはエスニックな手工芸品として売り出されているトルコ絨毯の世界に入り込むことになった著者が、絨毯のグローバルな流通に至るローカルな過程を丹念なフィールドワークによって明らかにした成果が本書である。京都大学大学院人間・環境学研究科に提出された博士論文をもとに公刊された著書であり、まずは掲載されている美しい絨毯の写真、調査村の風景に目を奪われる。

239

I 本書の目的と各章の概要

本書の「はじめに」の部分では、著者がなぜトルコ絨毯を研究テーマに選択することになったのか、そのいきさつが語られる。著者は絨毯の愛好家というわけではない。著者いわく、「経^{なていと}」としての婚姻慣習が、絨毯という「緯^{よこいと}」と交叉して織り合わさり、持参財という「模様」が織り込まれた「布」になっている。この一連の過程に垣間見える人々の生活世界に著者は惹きつけられたのである。実際、本書を通して読者がもっとも強く印象づけられるのは、女性たちが共同で織りなす、労働とも創作活動ともいえない、いきいきとした絨毯の生産風景だ。本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 モノを作る生活世界とグローバリゼーション
- 第2章 トルコ絨毯のグローバル流通史
- 第3章 ミラス―絨毯織りたちの村の日常
- 第4章 結婚におけるモノの競演
- 第5章 社交としての絨毯生産
- 第6章 絨毯織りたちの絨毯の使いかた―消費の多様性をめぐって

第7章 「花柄絨毯」——絨毯織りの村の西洋近代との出会いとその後
第8章 村から世界へ、世界から村へ——「真正な」絨毯と絨毯商たち
第9章 市場経済と交渉するものづくりの生活世界
——グローバルに流通する手工芸品がローカルに「息づく」こと

第1章では、本書を貫く理論的な枠組みと研究の目的が示されている。本書の問題意識は、(1) グローバリゼーション論、(2) 伝統の消滅／創造論、(3) モノ研究、(4) 絨毯へのまなざしと真正性をめぐる議論、という相互に関連する4点である。第1章で示されたこの4点の問題意識が、第2章から第8章で展開されるフィールドデータによって検討され、第9章では第1章で示された問いに答える形で議論がまとめられている。

第3章には調査地の概要が示されている。調査地であるトルコ絨毯の伝統的な産地のひとつであるミラス地方は、トルコ共和国の南西部ムーラ県に位置し、古くから付近の陸上／海上交易ネットワークの結節点であった。著者の主な調査地であるボザラン村の主産業はオリーブ生産を中心とした農牧業であり、絨毯生産は女性たちによる副業である。第6章によると、ボザラン村の世帯収入に占める絨毯収入の割合は3割以下だが、絨毯生産は世帯経済にとって軽視できない重要性をもっている。さらに絨毯は、人々のアイデンティティをも支えている。現在、ミラス地域村落部で牧畜は下火だが、日常的な床座とそれを支える絨毯の敷物は、彼らにとってかつての「遊牧民」としての自己像を語らせるモノになっている。以下では第1章で示された4つの論点と、それに応答する各章とを対比しながら、全体の概略を示してみたい。

1 グローバリゼーション論

本書の目的のひとつである、トルコ絨毯を例にグローバリゼーションをより長い歴史的な視座のもとに再定位し、ヨーロッパ中心主義的歴史観を問い直すこと、これに直接応答する章が第2章である。15世紀から17世紀のヨーロッパの画家たちが描いたトルコ絨毯からは、所有者の富や地位を象徴する貴重品として異教世界トルコからヨーロッパにもち込まれた絨毯の需要をうかがい知ることができる。キリスト教の宗教画に描かれたトルコ絨毯は、当時の東西交易の状況を如実に物語っており興味深い。ミラス地方では産業革命以前から、アルメニア人やユダヤ人やヴェネツィア人などさまざまな文化的背景をもった仲介者がトルコ絨毯のグローバルな流通にかかわってきた。第7章の花柄絨毯の事例でも、もとは19世紀末にユダヤ人が建てたアトリエで、ギリシャ人のデザイナーによって生み出されたデザインが、現在もトルコの「伝統」として受け継がれている。このように、トルコの「伝統」として扱われている絨毯には、異教徒や近代西欧との接触の歴史が少なからず織り込まれているのだ。

また、グローバル化の波は決してローカルな慣習を後退させるものではなく、むしろ活性化させている。1980年代の経済の自由化以降、持参財となるモノの種類と数は急増しているが、例えば持参財として早々と購入され「見せる」ように保管される大型家電製品に、著者は「グローバル」の文脈から来たものが「ローカル化」する過程を読みとる（第

4 章)。

2 伝統の消滅／創造論

今日の市場においてトルコ絨毯は、「何世紀にもわたり、母から娘へと受け継がれた遊牧民の文化的遺産」として語られる。第2章では、トルコ絨毯の「伝統」の変遷と語られた「伝統」との齟齬が辿られている。オスマン帝国時、絨毯は村ではなく都市の工房で織られていた。産業革命後の西欧資本の流入と、第一次世界大戦後のトルコ国営企業による効率重視の合理的経営は安価で低品質な絨毯の量産を許し、トルコ絨毯の危機が叫ばれるようになった。これに対して、1980年代には研究者たちがトルコ絨毯の「伝統復興プロジェクト」を立ち上げたり、1990年代にはトルコの文化観光省が後押しする形で、テュルク系民族の紐帯や過去の遊牧生活のつながりとして絨毯がみなされるようになったのだ。

このように一連のトルコ絨毯の歴史に見出されるのは、単なる実体化された「伝統」の再現ではない。「他者のまなざし」を取り入れた新たな「伝統」の創造である、と「伝統の創造」論者なら言うかもしれない。しかし著者は次のように反論する。「現地の文化を担う『主体』と彼らをまなざす他者の間およびその周囲には、さまざまな媒介者・媒介物が存在し、偶然性や時間のズレ、認識のズレ、そしてさまざまなノイズが飛び交う。また、彼らは必ずしも『伝統』を、他者に向けて発信するためだけに継承したり創造したりしているわけでもない」(8頁)。それゆえ、「ローカルな人々の、伝統に対する『創造的』側面を多分に認めつつも、かつ彼ら自身の生活世界との不断の交渉にも注目するという一種の『揺り戻し』をかけてみよう」(9頁)。本書の細やかな記述を貫く宣言とともとれるこの文章の背後には、あくまでも「伝統」を生み出す場に寄り添うことで著者が見すえた、ローカルな文化および「伝統」のしなやかさ、強靱さがある。生産の現場からもう一度「伝統」を見直そうという視点は、第5章で子細に検討されている。

第5章の絨毯の基本属性と染色工程も含むミラス地域における絨毯生産の過程の詳述は、手工芸研究としても資料的価値が高いものである。他の村落では廃れてしまった天然染料による糸の染色が今でも行われているボザラン村では、経験と勘に頼りながら女性たちが染色作業を行っている。そこでは母から娘に伝承されたやり方のみならず、村の内外から情報を得ながら、さまざまな染色方法が柔軟に試されている。いわば日常的な「伝統」との交渉と刷新があるというわけだ。絨毯を織る工程も同様である。1970年代末から80年代にかけて、市場経済化と技術革新(鋼鉄製織機の導入)、主たる生業の変化(労働集約型農業であるタバコや綿花の栽培から、オリーブの商業的栽培への転換)が生じた。これによって、世帯外の労働力が動員されるヤマック、オデュンチュと呼ばれる労働交換が活性化することになった。

第5章でもっとも興味深い点は、絨毯生産が社会関係に依存すると同時に、村の女性たちの社会関係も絨毯生産に依存している、という著者の指摘である。糸洗いの場で著者が耳にした「人がいなかったらわたしたち、絨毯なんて絶対に作れないわ」(148頁)という言葉は、単なる共同作業の必要性を述べているのではなく、織り作業や糸洗いにともな

う労働の苦痛と、その合間に交わすおしゃべりや慰労の食事の楽しみを共有することなくして、絨毯を作ることが不可能であることを示している。絨毯を織らない村へ婚出した女性、絨毯を織れないゆえに孤独を感じている村へ婚入してきた女性、夫の反対を押し切って絨毯織りを再開した女性の語りにみられるように、村の女性たちにとって絨毯を織ることは社会生活そのものであり、みずからの居場所を得ることと同義である。第4章の婚姻儀礼の記述でも、手間のかかる料理サルマを共同で用意する女性たちの姿が印象的であった。このような生活の場に組み込まれた共同性や労働、そこでの貴重な語りは、著者が同性として絨毯生産の場に寄り添うことで得られたものといえよう。

3 モノ研究

本書は、アパドウライやミラーらが牽引した、モノが関係を媒介する点に着目する1980年代以降のモノ研究の流れにある。モノの「交換」の場面に力点を置いたアパドウライと「消費」の場面に着目したミラーを踏まえつつ、本書があらためて注目するのはモノの生産の場とそこでの消費活動である。第4章、第6章ではコピトフの「モノの文化的履歴」[Kopytoff 1986]の議論を参照しながら、事例が紹介されている。

第4章では、娘方の嫁入り道具が派手なことで有名な調査地の婚姻儀礼が描かれる。結婚には、嫁入り道具の搬送と宴会が含まれる。持参品となるのは娘の生誕とともに作り始められるレース編みの敷物や絨毯、大型家電製品などの生活用品である。無機質な家電製品は経済的威信を示し、手仕事作品群は花嫁（とその母）の勤勉さや器用さなど人格と結びつけられ社会的威信を示すという。絨毯は経済的威信、社会的威信、両方にまたがる威信財である。このようなモノは婚姻にたずさわる人々を価値づける指標となり、その内容次第では破談さえ起きかねない。婚姻におけるモノの力は、われわれの社会に照らし合わせてみても合点がいくところであろう。

また第6章では、生産者たち自身による絨毯消費の諸相が論じられている。コピトフの議論において、モノは何らかの「商品文脈」のなかで「商品局面」に出たり入ったりする。本書でも、絨毯の多様な消費の位相は固定化されていない。人々の日常生活の必需品である絨毯は、現金獲得の手段であり売買の対象となる。興味深いのは、絨毯の場合、使用されたという「履歴」はその商品としての価値を減じることなく、むしろ使いこまれて価値が上昇するという点だ。ゆえに消費財としていったん使用された絨毯は、何らかの契機で商品局面に入りうるし、そのような商品候補性をもつ以上、蓄財の手段にもなりうる。これは絨毯がもつ保存可能という性質とも関係している。一方で持参財としての絨毯は、威信財になりえるが、個性化され、より商品候補性が低いモノである。また絨毯のなかには女系によって貴重財として引き継がれる、商品性からもっとも遠いものもある。

第6章では最後に、「駆落ち」がミラス地方で頻繁に起きていることが取り上げられ、絨毯生産を女性が担っていることとの関連性が示されている。この議論は論拠が弱く、第6章では若干浮いているように感じられた。この事例は第4章で触れるか、「駆落ち」という「物語性」を帯びるからこそ強い商品化圧力がかかるという第8章で紹介されている事例を第6章で論じてもよかったように感じられた。

4 絨毯へのまなざしと真正性をめぐる議論

近代西洋世界からエキゾチックなまなざしを向けられてきたトルコ絨毯は、「伝統」をめぐるさまざまな宣伝文句のもと、「天然染料」で織られ「手織り」の「世界に一つしかないオリジナルなモノ」として欲望されてきた。本物のモノを求める欲望によって「真正性」は構築される。これまでの真正性の議論では、真正性の基準を操作するのは常にわれわれ（西洋）の側にあったと著者は指摘する。しかし著者は絨毯の生産の現場から、西洋の消費者の嗜好に翻弄される第三世界の絨毯の生産者、といった視点の再考を促している。この議論を支えているのが第8章である。

第8章では、絨毯の「真正性」がいかに出現するのか、絨毯商たちの販売戦略と顧客である外国人観光客たちとの交渉から描かれる。外部の消費者の視点が浮き彫りになるこの章は、読者にとって身近に感じる章であろう。どのようなデザインが好まれ、観光客の絨毯購入の基準はどこにあるのか。村人たちには外国人が何を望んでいるのかわからない。また、ボザラン村で絨毯協同組合が発足したが、「真正な天然染料で染められた絨毯」や彼らが解釈する歴史に固執し、うまくいかない。その点、絨毯商は巧みである。さまざまな価格帯の絨毯を用意し、消費者の嗜好に合わせてパステル調の絨毯を作らせたり、絨毯の黒糸を取り除いたり、薬品やバーナーを用いて加工したりすることで絨毯を「アンティーク化」させ、「真正性」を攪乱する。もちろんここでいう「真正性」は移ろうものである。染めの失敗を示す「アプラーシュ」（「色ムラ」）が「真正」なる草木染の指標になりつつあるのはその好例だ。著者は過去にもあったアプラーシュの流行を例に、そのような真正性は操作されては市場で飽和し機能不全となり、また流行を繰り返すと指摘する。客が求める「伝統」や「ホンモノ」の指標は、西洋の消費者のみでなく、トルコ国内の絨毯商や生産者によっても操作されている、とまとめられている。

II 終章の議論をふまえて

以上が第1章で提示された論点に対応する各章の概略である。第9章でまとめられている議論と本書全体について、ここであらためて考えてみたい。

第一に、著者が描いたトルコ絨毯の歴史は、西洋資本主義世界を「中心」としない、モノのグローバル化の痕跡であった。著者はさらに、ローカルな「周縁」社会・文化が資本主義という「中心」に取り込まれるイメージを、ローカルな絨毯の生産と消費、活性化する労働交換によって批判している。確かに、トルコ絨毯の歴史は1990年代以降のグローバル化に先立ち、グローバルな人とモノの移動の歴史を示している。しかし、ローカルな価値がグローバル化によって活性化されるという観点は、すでに「グローバル化」という概念で指摘されており、新奇さは感じられない。また1990年代以降のグローバル化をそれまでのグローバル化とどこまで同列にとらえられるのか、議論が求められる点であろう。情報拡散や流通の速度が生産の現場にもたらしている変化、持参財の増大や出稼ぎ者の増大は、絨毯生産の現場にどのようなインパクトを与えているのだろうか。天然染料による染色と女性たちの共同作業が息づくボザラン村がグローバル化に対する耐性を示す事例

として有効であっても、それはどのような条件下で可能になっているのだろう。他村の事例や、本書ではあまり見えてこなかった男性の動向に目を向けることで、いま一度グローバル資本主義の駆動力を問うてみたくなる。

第二に伝統の創造論において、生産者の楽しみと誇りに満ちた領域に、著者は文化的他者との関係から独立した領域を見出している。さらに消費者の嗜好を映す「他者のまなざし」を内面化することは、伝統の創造論で述べられるほど安易ではなく、むしろ多くの誤解とすれ違いをともなうと指摘する。おそらくここにこそ、市場が介在する余地があるともいえ、そのすれ違いは第8章で示されるように、生産者と消費者の間に立つ媒介者によって調整され更新されている。「他者のまなざし」が実は異なるアクターによって共同で、しかも時空間的なずれをともないながら生み出されていることを著者が明らかにした点は、生産と消費、いずれかに偏向しがちであった従来の伝統の創造論を修正する視点として大いに評価できる。

なお、活性化する労働交換システムであるヤマックについて、著者は金銭の貸借と比較して、労働の「借り」がある状況が恒常的でありそこに負債感はないと述べる。著者はこの交換関係について、ゴドリエを引用しながら（遅延された）「返礼」が期待される「贈与」とみることできるが、長期的には確実に回収されることが期待されるという点で「市場交換」の要素も併せもつという（141頁）。「贈与」では非対称性が強まると、負債感が生まれ「反対贈与」が生じることも指摘されている。このあたりの「借り」をめぐるとらえ方や市場交換との連続性については、もう少し詳しく検討する余地があるかもしれない。

第三に、著者は生産の場と商品化以前の消費に注目することで、コピトフが対極的に捉えた「商品化」と「個性化」は必ずしも対立してはいないこと、モノは商品化の手前にあり移動していなくても、その「文化的履歴」は多層的な履歴を重ねうることを指摘する。多様な絨毯消費の位相から著者が導き出したのは、一枚の絨毯に複数の潜在的な用途が織り込まれていることで、生産者たちが暮らす世界に意味の「冗長性」が与えられているという点である（178頁）。生産者にとって複数の「消費の意味領域」があることによって、絨毯はグローバルな経済に節合しながらも再生産されつづけることになっているという。この指摘は示唆に富むものだが、さらに重要な点は、絨毯を生産する村の人間が持参財としての絨毯を他者から購入することはないという点である。単に自在に領域を超え、消費されるモノとして絨毯が存在するのではなく、ローカルな文脈に投錨し、交換されない次元があるからこそ保障されている意味の冗長性なのではないかと考えさせられる。

また著者は、労働の苦痛を楽しさに変える共同性や「コンヴィヴィアリティ」（「共生感覚」）（276頁）が、女性たちがみずからその経済的行為の結果物を所有することに支えられていると論じ、マルクスの「労働疎外」論と対比している。これらの点は、ゴドリエに加えてグレゴリー [Gregory 1982] やワイナー [Weiner 1992] らによるモノの「譲渡不可能性」の議論とも絡めて考察を進めれば、贈与交換／市場交換の二元論を乗り越える視点が拓けたのではなかろうか。

第四に、「真正性」の基準を操作する権力と意志を汲み上げた主体は、常に西洋の側で

あるとはいえない点が述べられている。確かに絨毯商たちによって「真正性」が攪乱されている状況は確認できたが、そこではやはり（西洋の）消費者のまなざしが「真正性」を大きく左右している点は否定できない。生産者にとって消費者の求めているものを知ることが不可解なもの、「真正性」や需要が複数存在する証左ではあっても、彼らがその基準を操作しているとはいえないのではなかろうか。それでも本書における豊かな事例は、真正性や伝統が人々の交渉のなかで生起する動態を見事に示していたといえるだろう。

章構成については、4つの相互に関係する論点が全体的に拡散している印象を受け、若干メリハリのなさを感じた。しかし何より著者の論点は明快で、労働における共同性の描写が読後も鮮やかに残る、みずみずしい民族誌である。われわれの日常は、著者が描いた共同性とどこまで連続性もちうるのだろうか。そこでとりあぐねる距離は、トルコ絨毯の先に確かにある人々の営みへのいざないでもある。

<参考文献>

- Kopytoff, Igor 1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process, In *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, A. Appadurai ed. Cambridge: Cambridge University Press, pp.64-91.
- Gregory, Christopher A. 1982 *Gifts and Commodities*, London: Academic Press.
- Weiner, Annette B. 1992 *Inalienable Possessions: The Paradox of Keeping-While-Giving*, Los Angeles: University of California Press.